

國學院大學学術情報リポジトリ

紹介 井上順孝編『21世紀の宗教研究：
脳科学・進化生物学と宗教学の接点』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 一男, Matsumura, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000110

〔紹介〕

井上順孝編 『21世紀の宗教研究』

― 脳科学・進化生物学と宗教学の接点 ―

松村一男

本書は二〇一三年九月に國學院大學で日本宗教学会学術大会が開催された折に國學院大學日本文化研究所と日本宗教学会の共催で行われた、「ネットワークする宗教研究」をテーマとする講演会での原稿を基に編まれている。編者あとがきによれば、こうしたテーマが選ばれたのは、伝統的な宗教研究と並行して、認知科学の視点を取り入れた新しいタイプの研究がここ二〇年ほど目立ってきたからである。こうした一九九〇年代からの、脳科学（ニューロサイエンス）、進化生物学、コンピュー

ターサイエンス、認知哲学といった新しく展開してきた多様な分野における、従来とは異なるタイプの宗教理論を広く紹介し、進化論的な視点から宗教研究の一層の発展を期待するというのがのである。

井上教授は同年の國學院大學における学術大会開催の責任者であり、また当時は日本宗教学会の会長職にもあつた。井上氏は新しい宗教研究の動向に長年関心を持ち続けてきており、このテーマの設定は実に適切なものであつたと思われる。そして

講演者の見事な顔ぶれも、井上氏の幅広い交友があればこそ可能となったのであろう。講演の原稿を基にしているため、難しい内容にもかかわらず平易な表現が用いられており、専門家はかりでなく一般読者にも宗教学の最新の研究動向を広く知らしめるうえで大変に有益であると感じた。巻末の参考文献も分量は多くないが精選されている。

まがきに続いては、井上氏による全体論「宗教研究の新しいフォーメーション」があり、その後三人の講演者による個別専門領域からの論考が講演と同じ順序で並んでいる。最初は比較神話学者であるハーバード大学のマイケル・ヴィツェル教授による「神話の「出アフリカ」——比較神話学が探る神話のはじまり」、次に進化生物学者である総合研究大学院大学教授の長谷川真理子教授による「進化生物学から見た宗教的概念の心的基盤」、そして最後に、専門はキリスト教神学だが近年、脳と心と宗教の関係について積極的に発言されている京都大学教授の芦名定道教授による「脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方」である。以下では各論文の構成を章立てによって示し、あわせて書評者にとってそれぞれの論文の中で今度の宗教研究や神道研究に示唆を与えると感じた点を紹介してみたい。

井上氏の論文は八つの章（一、誤解された進化論、二、進化

論を脅威と感じる宗教とそうでない宗教、三、対象は広がり、境界線は見えなくなる、四、動物とヒトとの距離を縮める研究の広がり、五、宗教心は特別なものか？、六、ミーム論と宗教文化、七、コンピュータ・テクノロジーの広範な影響、八、宗教研究のための新しいシノプス形成）からなる。

井上氏は博愛主義を唱える宗教の名のもとに差別や攻撃や殺戮が行われること、そしてそうした宗教の間で戦争が起こることなど、宗教のもつ矛盾について指摘し、それについていまだ適切な説明がなされていないとする。そしてその謎を解くヒントは、人類の脳の進化の過程の解明にあるのではないかとする。たとえば「進化的環境適応」説では、人類の認知能力はまだ小規模集団生活を営んでいた百万年前から一万年前の長い時間をかけて形成されたため、現代社会の巨大組織での問題解決に際しては、そうした小規模集団的な解決方法では不向きであり、そのため宗教を含むさまざまな闘争が起こるという説明がされている、という。こうした人類の脳の進化への注目、他方、人間の脳の不変の部分つまり動物一般の脳とも共通するような脳の古層部分もまた宗教と関わりを持っているのではないかという見方にもつながっている。宗教が祈りや儀式によって言語以前の人間の情動レベルに働きかけ、宇宙との一体感や神

秘体験や悟りを生み出すことがあるのは、脳が持っている本能的共感のプログラムに由来するのではないかというのである。

ヴィツェル氏の論文は「はじめに」と三つの章（一、言語以前の神話、二、神話学の新しい課題、三、起源をめざして）からなる。

ヴィツェル氏によれば、現生人類が今から七万五千年前くらいにアフリカを出て世界中に拡散していった時（「出アフリカ」、人類はすでに神話を有しており、その神話を再建することが可能であるという。人類はいつの時代にも神話を必要としており、必要に応じてさまざまな神話を繰り返し作り出してきたが（近年ではアメリカの神話、北朝鮮の神話など）、歴史言語学や遺伝子学において用いられている、世界中のサンプルを比較して古形を再建する手法を導入することで、比較神話学は、現在残っている神話群から過去の人類の動きやある地域と時代にあった神話を高い確率をもって再建できるといわれる。現生人類誕生から現在にいたるまでの人類史にはいくつかの特徴的な神話タイプが見られ、それらからは人類の時代毎の願望とその変化を知ることが出来るだろう、という壮大な理論が語られている。

長谷川氏の論文は「はじめに」「宗教概念」の普遍性」と

七つの章（一、宗教の機能は何か？、二、世界の成り立ちの説明について、三、いいことと悪いことの基準、四、死後の世界に対する不安、五、世界の悲惨に対する慰め、救い、六、ヒトの社会生活における葛藤―内集団対外集団、七、認知と宗教）と「まとめ」からなる。

長谷川氏は進化生物学の視点から、人類にとって絶対に必要な「機能」を備えているからこそ、宗教は世界中どこにでも存在するという前提で宗教を考察する。その機能は、①出来事の原因を納得させる、②道徳的価値基準を示す、③死と死後を説明し、魂の行方を示す、④悲惨に対する慰め、救いの提供、⑤内集団を結束させ、外集団に対して備える、という五つに分けられる。そして宗教的概念が生物学的・脳科学的基盤を有することを確認した後、これら五つの機能は互いに関連しており、そうした関連を可能にしている認知的基盤として、①因果関係の理解と因果推論の能力、②自意識と共感の能力が考えられるとする。そして結論として、宗教概念は不安を避け、ストレスを軽減して健康を阻害しないためにヒトの脳に固有の認知・情動プロセス群から生み出されたものではないかと述べている。

芦名氏の論文は「はじめに」と三つの章（一、近代以降の思想状況とキリスト教研究、二、「脳・心・宗教」問題圏―脳科

学と宗教、三、社会脳と宗教」と「むすび」からなる。

科学技術が進歩した現代にあつて、宗教には存在意味があるのかという宗教批判があるが、それに対して宗教とくにキリスト教はどのように答えようとしているかという状況確認がまず行われ、その後、この問題に対する脳神経科学の知見に基づく研究の展開の紹介が行われる。二〇〇〇年頃までに、病院などで見かける脳の活動を画像化する装置であるfMRI（磁気共鳴機能画像法）をはじめとする実験技術が確立され、これによって宗教現象を脳の活動の視点から解明しようとする脳神経宗教学という研究領域が生まれた。さまざまな実験の中には脳の側頭葉に電極で刺激を与えると神の臨在感を経験するというものもあったという。そうした議論は脳と宗教現象（心）との関連が因果的に説明可能であるという前提に基づいていたが、それは残念ながら宗教体験を自然現象として説明できる一種の妄想と位置づけ、宗教の虚偽性を示すという宗教批判の議論にも用いられてしまった。宗教（心）と脳の相関性よりも、それを因果関係として説明してしまう論理的飛躍がなされたのである。もちろん同時に、そうした行き過ぎに注意するならば、「脳と心」の問題は、心をめぐる宗教の比較研究や宗教間対話の豊かな可能性を秘めているという認識も広まることになった。二〇

〇〇年以降の第二期では実験室での知見をいかに実際の宗教生活との隔たりをいかに近づけるかが問題となってきた。そこで多くの人（脳）が多層的なネットワークを構成しているという社会脳（ソーシャル・ブレインズ）仮説が有効になってくる。それによつて前述の還元主義的な自然主義の傾向が克服でき、きるかも知れないのである。

（A5判、二二六頁、平凡社、二〇一四年八月発行、定価二、四〇〇円＋税）